

小半次

「みなまでく／＼小半次といふごうのもの
ここにあり おいらがのりこしせんぢんせん

吉六

「これさふたりしておいらを中にさきをあらそは
れちやくるしくツてならねへそのいたさきへはおれ
がこすはへ

米五郎

「なんのこしやくなそふはいかぬぞなんでもおいらがさきへこす

雁八

「エイいちのわるいはなされねへかわがとうの一ばんかけは
おれさまにかぎるわへ

米十郎

「なんのふたりにさきをこされてたまる
ものかおいらのぬいきでのおよぎ
ふりそこのいて みてあたく／＼

源十郎

「おいらもをなじくおやかたへすま
ねへかへそこはなした

小文治

「ヤイまで源十米十やおいらがさきへ
ござなくつツちや おやかたの
まいへかほかたらねへ

国太郎

「わたくしもみなさんのやうにはやへ

このなんじよかこしたいものさ

錦升

「これさ八百さんマアまちなせへ

八百蔵

「ア、くちをしいだいぶあとへとりのこ
されたサアせいをだしやせうぞ

福助

「さくらが川のまん中だい、へく
なんだかきかもめてならなへ

栄三

「どうぞわたしは田之さんぐらいの
ところまではやくいききたいものサ

三津五郎

「栄さんはやくおいでなたがひに一座
にゐてなふもおいのこすのなんのといふ
にはをよばないしたがおまいはおやがある
からおほきふつよひねへ

九蔵

「どうぞれんだいのやつらをのつこしてへものだ
川ごししうはやくたのみやすせおやがか
むかふにまつておるからさ

新之助

「エイざんねんくゝいへのかぶでこゝまづは
はやくきたものをおつことされちやうかふせがねへ

訥升

「イヤめんぼくしてへもねへことぞそりやうの甚六
おとうとのさい六にかなわずこれでもどつつか
していまにいつそくとびに「して見せるぞで

田之助

「あにさんはやくおいでなわたしと見なこの
どつりれんだいにのつてらく／＼と
こすものをいくぢのねへかた
ぐるまとはなにことだへそれ
これにはらまつてをちなさんなヨ

羽左衛門

「そりやモウこぎつけ
たぞわけはねへしかし
これもをやのひかりで
ありがとへこひるぎ
さまのをかげさ

鶴蔵

「なんのれんだいもかた
ぐるまもいるこつちや
ねへこれでもそんな
にそんなにばかにし
てもらいたくはねへ

ハノノノノノ

三十郎

「どつこつそ「があふ
ない／＼しづかに／＼

おいらもをほへがある
かくるしいとこだぞ

菊次郎

「サア／＼わかい
しうははやく

をわたりな

わたしはつれ

がなくなつてさ

みしくつてさ

みしくつて

ならねへから

紫若

「わたしハモウあがつたもどうやう
ドレーツふくやりませうかしかし
こゝがだいじなところだけれども

権十郎

「これは／＼おやふんたちだいざ

おはやうございましたわたし

もおかげでまうこゝまでのりつけ

ました

新車

「みなさんせいをだしてはやくおいで
などうせちつとはくるし／＼とまがま
んがだいじきよくわたしもいわれたもの

彦三郎

「なるほどたかしまのおやぶんの
いふとふりずいぶん見てゐると
きがもめるやつさね」

小團次

「さて／＼てめへたちはおいらより
なりは大きくツてもちえのね」
やつらだぜじやまひろ／＼やつらは
ほうりだしてさつ／＼とこゝまで
くるがいゝいくぢのねへきをのま
せるもほどがあるは」

亀藏

「わたしがこしたじぶんよりせがれ
はほねもかゝらずにはやくやす／＼
こしてうれしいがかめ藏と
いへばかめのこみたやうにせがれ
にむかつては手もあしもでね」
アノをひてはきりんもどばに
をとるとはよくいつたものだ

芝翫

「わたしもみなさまとなきおやのひかりで
川はやうやく／＼してましたゆへ一ツぶ
のまふとおもつてみてあつときが
もつてそれ／＼ふく助をこらさ
しつかりたのみやすぞ

團藏

「やれ／＼はげしいみなものしうそれに
つけてもせがれの九蔵はやくこゝま
でとんできやれ九蔵子にして團蔵
にするから

千歳の屋述